

しいむじな

2024・秋

86

特集

道標を調べる



新旧の道標たち(神崎町並木)

房総のフィールド・ミュージアムとは

房総を舞台に、地域の自然や文化そのものを「資料」や「展示物」ととらえる、千葉県立中央博物館によるフィールド事業（野外で展開する博物館活動）の一環です。観察会を開催したり、君津市立清和小学校の校舎を利用した「教室博物館」を拠点に、地域の方々のご協力のもと、資料の収集や調査・研究等の活動を行っています。

【表紙写真】
交差点に集められた4基の道標。江戸時代中頃から昭和までの六地藏や道祖神、庚申塔などと併用されている。傍には現代の擬木の案内板も立っている。江戸時代の道標は行き先をかなり遠方まで表示しているが、現代版は最寄り駅までとなっている。時代による歩行範囲の違いが表れていて面白い。

フィールドにはその土地ならではの人の営みの跡がたくさん残されています。それらは地域の歴史を考えるうえで多くの情報を提供してくれる貴重な歴史資料です。しかし現代社会にとっては不要と思われるものも多く、いつの間にか整理されてしまったものもたくさんあります。江戸時代以降、数多く建てられてきた石造物も、道路工事や土地開発などですぐに移動もしくは整理されてしまうことも多い資料たちです。今回はそのような石造物のうち、通行する人々に行き先を案内してきた道標たちを紹介します。そこに刻まれた文字の形や地名の呼称、行き先の表示範囲など今とはかなり感覚が異なっていて、たいへん興味深い資料です。

(米谷 博)

特集

道標を調べる

渡船場を示す道標

地域の旧道を歩いていると四つ角や集落の入り口などに、江戸時代から昭和にかけて建てられた石造物を見かけます。そこに新しい花が供えられているのを見ると、今でも地元の人々が大切に守っていることがわかります。多くは庚申塔や道祖神などの供養塔ですが、なかには右へ行くと何処、左へ行くと何処というように道標を兼ねている石もあります。

道標は現代風にいえば道路標識のことですが、この道がどこへ続いているのかを一目で分かるように表記されています。自動車のス

ピードならばあの大きさが求められるかもしれませんが、人の移動が徒歩だった時代は高さ1m程度の石柱で十分だったわけです。そこに刻まれた地名は、その場所を通った当時の人々が目的地または通過地として意識していた場所です。彼らがどの位先の地名まで必要としていたのか当時の距離感覚を窺うことができます。また地名の文字は誰でも読めるように多くは仮名書きです。明治以降は漢字表記も増えますが、行政的な正式名称ではなく当時の人々が使っていた通称の街道名が刻まれているのも興味深いです。

香取郡周辺だとそこには「なりさん」(成田山)や「じゅりんじ」(樹林寺)、「かんとり」(香取)などの寺社や「さはら」(佐原)や「てうし」(銚子)などの町場が記されます。また「さわらへちかみち」(佐原へ近道)や「さくみち」(作道)や「むらみち」(村道)などは谷津田や集落へ迷い込まないように親切的な表記もあります。そのほか「かづさみち」(上総道)や「えどみち」(江戸道)など遠方の地名も見られます。香取から江戸へ向かう人々がこの周辺を歩いていたわけです。

「さくらへちかみち」(阿波)や「かしま」(鹿島)、「いぎす」(息栖)、「つちうら」(土浦)などの利根川の向こうの地名を刻んだ道標も見られます。それはこの先に渡船があるのです。そこへの道を示しているわけです。今では川面も見えず親水感が薄くなってしまうた利根川ですが、堤防の上からはすぐ近くに対岸の茨城県を望むことができます。かつてはこの地が渡船場として向こう岸との窓口になっていたのでしょう。現代の地図では川が境界となっている対岸どうしも、渡船場を意識するとまた違った地域間のつながりが見えてきます。

多くの道標は元の場所から移動されてしまっていますが、江戸時代の人々が読んだのであろうその文字をみながら、そこに刻まれている地名や方角を考え、元の場所を想像したりするのもフィールドワークでの楽しみの一つです。

(米谷 博)



写真① 「さくらへちかみち」。安政6年(1859)香取市牧野
写真② 「右 江戸 なめ川 道」。安政2年(1855)香取市大戸川
写真③ 「南はかんとり 西は鳥居かし」。鳥居かしは津宮河岸の通称。
安永8年(1779)香取市津宮
写真④ 「此方 かうさき あば つちうら」。阿波、土浦は対岸の茨城県。
寛政12年(1800)神崎町並木

コラム

房総の動植物 (6)

落ち葉や小枝に生える
ミクロなきのこ

きのこといえば、傘と柄をもついわゆる「きのこ型」(通称ハラタケ型)を思い浮かべる方が多いでしょう。その多くは担子菌類というグループに属します。しかし、菌類のもう一つの主要グループである子囊菌類には、直径が1ミリ程度の極小のきのこを作る仲間がいます。筆者が主に調べているのは、その中でも「ビョウタケの仲間」とよばれる一群です。

ビョウタケの仲間といっても、分類学上の位置づけでは目に相当し、世界で約30科6000種以上が知られる、きわめて多様なグループです。多くは地上に落下した樹木の葉や枝の上に、直径1ミリ内外の画鋲型のきのこをつくりまわします。皆さんも、5、7月頃に近くの林を散策する機会があれば(写真①)、ぜひ落葉を手にとって眺めてみてください。目が慣れてくると、湿った落葉の上には無数の粒のようなものが観察できるようになります(写真②)。これがビョウタケ目の菌で、ルーペで拡大してみると、小さいながらもきのこの形をしています。

房総半島はミクロなきのこの宝庫？

面白いことに、ビョウタケ目菌の多くは決まった植物の遺体から発生し(基質選択性という)、それを分解して養分を得ています。したがって、どんな種類の菌が発生

するかは、その土地の植物相によって大いに影響されます。

房総半島では、専門家と市民が協同して詳細なきのこ調査が行われており、大型の担子菌類を中心に700種類もの野生きのこが報告されています。しかし、ビョウタケ目菌類は長尾・吹春(2002)によって20種弱が報告された以外は、ほとんど調べられていません。そもそも、日本では照葉樹林(※1)にどんなビョウタケ目菌類が生えるのか、ほぼ未解明のままです。

筆者は今年4月に中央博物館に着任し、房総半島のビョウタケ目菌を調べ始めたばかりですが、5月に東京大学千葉演習林の照葉樹林を訪れたところ、早速スダジイの落葉上にビョウタケ目菌の一種を発見しました(写真③)。この菌はシイカシヒナノチャワンタケ(*Eriocyphella sinensis*)で、筆者が2022年に日本新産として報告したものです(Tochihara & Hosoya 2022)。茨城県や神奈川県、島根県、佐賀県から知られていましたが、房総半島からは初めての発見となります。実際には日本の照葉樹林に幅広く分布することが示唆され、照葉樹林の落葉の分解者として、生態系で重要な役割を担っていると考えられます。

さらに、6月の訪問では、何気なく拾ったヤマモモの落葉に、見慣れない菌を発見しました(写真④)。黒い剛毛が目立つこの菌は*Hymenotremella*属の一種と判明しました。この属は南半球に分布の中心をもち、日本からは未報告で、未記載種(※2)の可能性もあることから、現在さらに詳しく調べています。

く調べています。

このように、房総半島の照葉樹林はミクロな菌の宝庫と思われ、多くの新種がみつかる可能性を秘めています。落葉や小枝の上に小さなきのこを見つけた際は、ぜひ博物館までお持ちください。一緒に名前を調べましょう。あなたも新種の発見者になれるかもしれません。

(栃原行人)

※1 照葉樹林

タブノキやスダジイなどの常緑広葉樹からなる林。房総半島を特徴づける植生。

※2 未記載種

これまで発表されたことがない種。これを論文発表することで新種として認められる。

引用文献

長尾英幸・吹春俊光 2002. 千葉県菌類誌(Ⅲ) 子囊菌類不整子囊菌綱および盤菌綱. 千葉県立中央博物館自然誌研究報告 特別号 5: 111-132.

Tochihara Y, Hosoya T (2022) Examination of the generic concept and species boundaries of the genus *Eriocyphella* (Lachnaceae, Helotiales, Ascomycota) with the proposal of new species and new combinations based on the Japanese materials. MycoKeys 87: 1-52.



写真① 千葉県立中央博物館生態園の照葉樹林。湿った落葉が地表に堆積し、ビョウタケ目菌の発生に適した環境。
写真② ビョウタケ目菌が発生した落葉。白色とオレンジ色の2種の菌が棲み分けている。
写真③ スダジイの落葉上に発生したシイカシヒナノチャワンタケ(矢印、左上は拡大)(東京大学千葉演習林)。
写真④ ヤマモモの落葉上に発生した未知種(*Hymenotremella* sp.) (東京大学千葉演習林)。

観察会報告 夏の山の昆虫

7月20～21日(土・日)、鴨川市清澄山にある東京大学千葉演習林と共催で昆虫の観察会を行いました(参加者27名)。1日目は夜のライトトラップを行いました。昨年は観察できなかったカブトムシのオスが飛来し大盛り上がり。2日目は森の中で樹液に集まる昆虫を観察しました(写真①、②)。(樽宗一朗)

観察会報告 川の生きもの

7月28日(日)と8月25日(日)に君津市の清和県民の森で観察会「川の生きもの」を開催しました(参加人数はそれぞれ37名と31名)。清和県民の森内の川で魚やサワガニ、水生昆虫を中心に観察しました(写真③、④)。(樽宗一朗)



写真① ライトトラップの様子
写真② 樹液に集まる虫を探す
写真③ 生きものを検索
写真④ 最後に観察できた生きものの解説を行なった

連載

小櫃川流域の生きもの シロスジコガネ ～海岸の松林に生息～

初夏の晴天の日、下流域のアシ原が輝いていた。この季節、昆虫が多く現れると期待して虫捕りにやってきた。アカテガニが暗がりではガサガサと音を立てて、走り去る。アシ原に踏み込み、昆虫網ですくい取ったり、棒で度々葉を叩いたが、虫が飛び出す気配がない。「少し時期が早かったか？」とがっかりしたが、反対側の路傍のセイタカアワダチソウの茎に一匹の茶色の甲虫がいた。全身褐色、白い筋。「シロスジコガネ！久しぶり、生きているのは初めて」と嬉しくなった。幅広い触角があるので、オス。「こんな場所に潜んでいるの？」と驚いた。近づくと「ギシ、ギシ、ギシ」と音を出している。「私を脅かしている？」と思った。彼は、写真を撮っている間、音を出し続けていた。下流域の広い

草原でみつけた、この大型のコガネムシは清々しく魅力的な昆虫であった。実は、約10年前の8月、近くの海岸のキミガヨランの葉の間から、この虫の死骸(オス)を発見したが、それ以来である。シロスジコガネの幼虫は、松林の土中で生活するといわれている。近くの海岸にはクロマツの防風林があるが、年々、狭くなってきている。この種が生息し続けられるように、今後も海岸の草原やクロマツ林が保全されることを願っている。

参考文献

・千葉県保護上重要な野生生物―千葉県レッドデータブック―動物編2011年改訂版及び2019年改訂版

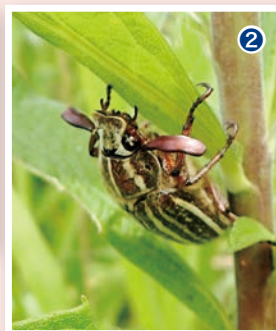
(文・写真 千葉県立中央博物館ボランティア 成田篤彦)

MEMO シロスジコガネ コガネムシ科

体長24-32mm。千葉県選定要保護生物、海岸砂地、または湖岸砂地に生息している。幼虫は砂地に生える松林の土中に生息しているようである。灯火に飛来する。分布は、北海道、本州、四国、九州。県内では富津市、富山町、鴨川市江見地区、銚子市、木更津市、市原市、御宿町、館山市、八日市場市、千葉市、印西市、佐倉市、千倉町、和田町などに記録がある。海岸地帯に多い。保護対策は海岸草地、海岸の松の防風林の保全。



写真① 海岸のクロマツ林(左上)
2017/6/5
シロスジコガネ
2024/6/16



しいむじなの由来



房総のフィールド・ミュージアムのニュースレターのタイトル「しいむじな」は、アナグマをさす房総丘陵の方言です。ムジナは地域によってアナグマやタヌキをさすなど様々なのですが、千葉県内ではアナグマのことが多いようです。房総丘陵の人々は、大きなスダジイの木のウロに棲んでいるムジナを、愛情を込めて「しいむじな」と呼んでいます。

今回は、道標ときのこの話題をお届けしました。
普段何気なく歩いている道にもある石造物に道標を兼ねている石もあるのですね。注意深くみてみたいと思います。移動手段が変わると道標のサイズや距離が変わることについて非常に興味深く感じました。秋といえはきのこですが、身近な環境で多くの新種が見つかる可能性があります。見つけてみたいものです。

(樽宗一朗)

編集後記